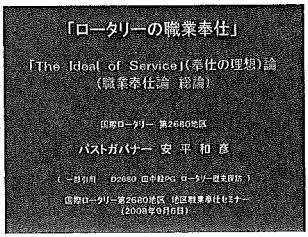
2008-09年度職業奉仕セミナー2008. 9. 6

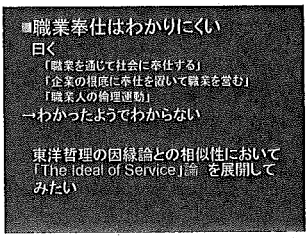
講演

「ロータリーの職業奉仕」

安　平　和　彦　アドバイザー

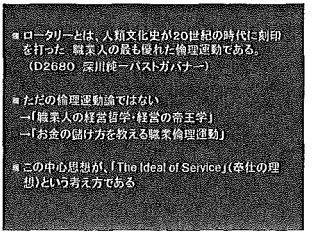


本日はこんなにも沢山の皆さんにお集まりいただきまして、私の拙い話をお聞きいただきますことは、大変光栄でございますし、また緊張もしております。また私のロータリー学の先生でいらっしゃいます深川先生にもご臨席いただいておりまして、「あいつ一体何をしゃべるんや」ということで、大変ご心配もいただいていると思いますけれども、折角の機会でございますので、しばらくお話をさせていただきたいと思います。何分、若輩でございますので、大した話もよう致しませんけれども、どうぞよろしくお願いしたいと思います。



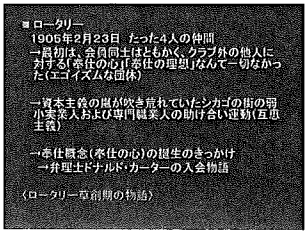
本日の話の最初は、ロータリーの理念の中核である「The ideal of service 論」を、ロータリーの職業奉仕論を中心として、かつ東洋哲学の因縁論との相似性において、その理念の歴史をたどってみたいというふうに思っております。そして後半は、職業奉仕論の各論ということで、売買とか同業組合とか、そういうさまざまな場において、奉仕の理想、「The ideal of service」の適用として我々がなすべき実践の課題に、主として深川先生の「ロータリー学入

門」における論文に依拠させていただきながら、簡単に触れてまいりたい、というふうに思っております。なお本日の私の話のほとんどは、深川先生のお教えを私ふうの表現に変えているだけでございまして、私の説明と深川先生のお教えが異なる時には、深川先生のお教えが正しくて、私の解説が間違っているということでございますので、そのようにご理解いただきたいと思います。それからここにありますように、今日のスライドの一部は、当地区の田中パストガバナーの「ロータリー歴史探訪」のスライドを引用させていただいております。大変有難いことと、感謝申し上げている次第でございます。

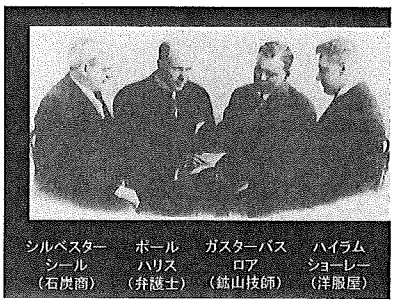


そこで本論に入りたいと思いますけれども、「ロータリーとは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である」というふうに、深川先生は常々おっしゃっておられます。私は、「倫理運動ではあるが、ただの倫理運動ではなく、職業人の経営哲学、経営の帝王学なんだ」と。一寸誤解を生むかも解りませんけれども、それを恐れずに言うならば、「お金の儲け方を教える職業倫理運動だ」というふうに思っております。皆さん方は、いろんな経営セミナーというのがあって、それにお出でになって、高いお金を払ってお聞きになるわけでありますけれども、ロータリーでこの職業奉仕を学べば、まさにその経営学を学んだのと一緒だというふうに思っております。この中心思想が「The ideal of service 奉仕の理想」という考え方であります。今日は、総論としてはこのことを中心に、お話をさせていただきたいと思います。

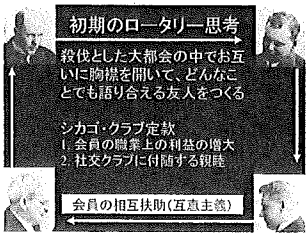
ご承知のとおり、ロータリーは1905年の２月23日に、たった４人の仲間で生まれました。最初は、会員同士はともかく、クラブ外の他人に対しての奉仕の心なんてまったくないエゴイズムの団体でございまして、資本主義の嵐が吹き荒れていたシカゴの街の弱小実業人や専門職業人の助け合い運動、互恵主義から始まりました。そういう中で、奉仕概念の誕生、奉仕の心の誕生のきっかけは、弁理士のドナルド・カーターの入会物語でありました。したがいまして、しばらくはロータリーの草創期の物語をさせていただきたいと思います。なおこの辺のところは、先般の地区協議会でしゃべらせていただいたところとダブりますけれども、今日は３年未満の会員の方も沢山お出でになっておりますので、前にお聞きになった方は、復習ということでお聞きをいただきたいと思います。



このたった４人の仲間、シルベスター・シール・石炭商、ポール・ハリス・弁護士、ガスターバス・ロア・鉱山技師、ハイラム・ショーレー・洋服屋、この４人の仲間が、最初のメンバーでありました。最初のロータリーの思考は、「この殺伐とした大都会の中で、お互いに胸襟を開いて、どんなことでも話し合え、語り合える友人を作ろう」というふうなところから生まれました。シカゴクラブの最初の定款も、「会員の職業上の利益の増大」、そして「社交クラブに付随する親睦」と、この２か

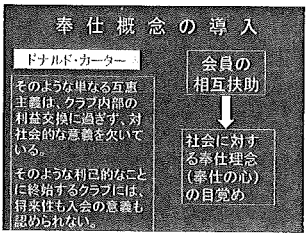


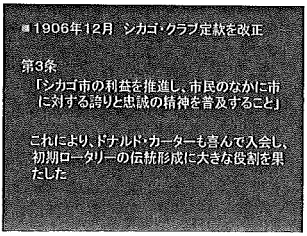
※田中ＰＧ「ロータリーの源流」より引用



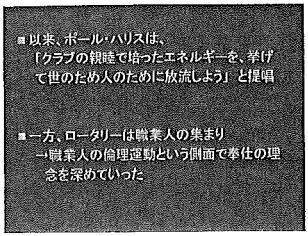
条のみでございました。そこでは、会員の相互扶助、互恵主義というのが、大変重要視されました。この互恵主義にも色々ございまして、例えば、クラブのメンバーが、石炭が欲しいということがありましたら、それは会員のシルベスター・シールのところで買おうよと。洋服が欲しいと思ったら、同じ仲間のハイラム・ショーレーのところで作ってもらおうよと。お互いに会員同士の原価の取引というのが、お互いの物質的互恵ということでありました。それから、会員の方以外の一般市民の方が、「洋服を作りたいのだけど、どこかいいとこないかな」ということをメンバーに聞きましたら、「それはハイラム・ショーレーのところがいいよ」とか、「石炭が必要ならシルベスター・シールのところがいいよ」ということで、メンバーの紹介というか、メンバーの宣伝をしてあげる。3つ目は、お互いの商売の智恵を交換する。それぞれの職業にはそれぞれのノウハウ、智恵があるわけですから、そういう智恵をお互いに教え合う。そういうふうな助け合い。このような会員の相互扶助からロータリーは始まったということであります。

そういう中で、ロータリーに奉仕概念を導入したのが、ドナルド・カーターの入会物語であります。ご承知のように、弁理士のドナルド・カーターに入会を勧誘したところ、カーターはその説明を聞いて、「そんな単なる互恵主義は、クラブ内の利益交換に過ぎず、対社会的な意義を欠いている。そんな利己的なことに終始するクラブには、将来性も入会の意義もないよ」と、こういうふうに言って、



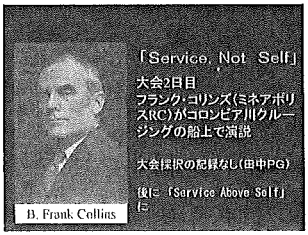


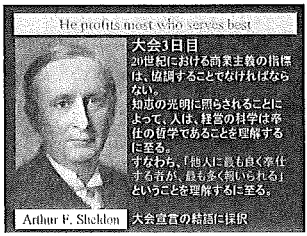
入会を断ったわけであります。そういうことから、ポール・ハリスは大変反省をいたしまして、なるほどカーターの言うとおりだ、と言って、クラブに諮ってシカゴクラブの定款を改正し、第３条に「シカゴ市の利益を推進し、市民の中に市に対する誇りと忠誠の精神を普及すること」という条項を加えました。これにより、ドナルド・カーターも喜んで入会し、初期ロータリーの伝統形成に大きな役割を果たした、というふうに伝えられております。以来、ポール・ハリスは、「クラブの親睦で培ったエネルギーを、挙げて世のため人のために貢献しよう」というふうに提唱いたしました。



※田中ＰＧ「ロータリーの源流」より引用

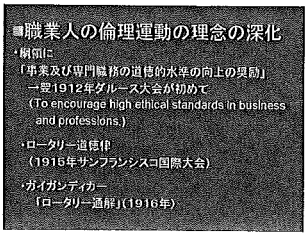
一方、ロータリーは、職業人の集まりでありますので、職業人の倫理運動という側面でも、奉仕の理念を深めて参りました。すなわち、1911年、ロータリーが出来て６年目でございますけれども、全米ロータリークラブ連合会の第２回大会がポートランドで開かれました。この時に、ご承知のように、ミネアポリス・ロータリークラブのフランク・コリンズが、コロンビア川のクルージングの船上で、「Service, not self」というふうに発表をいたしました。これにつきましては、後で少し説明をいたしますけれども、田中パストガバナー





の話では、大会の採択の記録は無いというふうにおっしゃっておられますが、ロータリー通解にもこの「Service, not self」で引用されており、その頃のロータリーの世界に大変大きな影響を与えた標語だと思いますが、後に「Service above self」というふうに変えられました。この辺りは、後で話をさせていただきたいと思います。それから、同じポートランドの大会の3日目に、アーサー・フレデリック・シェルドンが、「20世紀における商業主義の指標は、協調することでなければならない。智恵の光明に照らされることによって、人は、経営の科学は奉仕の哲学であることを理解するにいたる。すなわち、他人に最もよく奉仕するものが、最も多く報いられるということを理解するに至るのだ」というふうに、これはチェスレー・ペリーがシェルドンの原稿を読んだ。シェルドンはこの大会には参加できなかったようですが、チェスレー・ペリーが代読をしたというふうなことでありますけれども、参加者に大変感激を与えたというふうなことでありまして、この「He profits most who serves best」日本語では「他人に最もよく奉仕するものが最も多く報いられる」というふうに訳されておりますけれども、この標語が大会宣言の決議に採択されたということでございます。

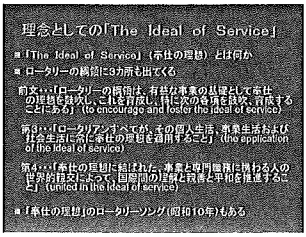
そういうふうに、今「service」という言葉が出ましたけれども、この時以降、急速に職業人の倫理運動としての理念が深化されてまいりました。綱領にこの職業倫理の問題が明記されたのは翌1912年のダルースの大会でありまして、「事業及び専門職務の道徳的水準の向上の奨励」という文章が綱領に入りました。英語では「To



encourage high ethical standards in business and professions」ということで、ロータリーが1905年に出来まして7年後、1912年のダルースの大会で、ロータリーの一番大切な綱領の中に「事業及び専門職務の道徳的水準の向上の奨励」という条項が入った訳です。その後、流れとしては、これも後で申しますけれども、1915年にあの有名な「ロータリー道徳律」が決議されました。そしてその翌年には、ガイ・ガンディカーの「ロータリー通解」にロータリー道徳律が掲載されました。そしてその後の綱領の動きでございますが、1918年のカンザスシティ大会では、「The ideal of SERVICE」という言葉が初めてロータリーの改正綱領の中に謳われました。そして1921年のエジンバラ大会でも同様でした。その後、1922年のロサンゼルスの大会の改正綱領、これは今日の綱領の原型となった綱領でありますけれども、ここでは3ヶ所にわたって、「The ideal of SERVICE」「The ideal of service」それに「The rotary ideal of service」という、そういう言葉も使われまして、綱領のなかに、「The ideal of service」という言葉が、理念の中心に打ち出されてまいりました。そしてこの流れが、翌年の1923年のセントルイス大会での決議23－34につながっていくわけです。そういうことで、ずっと流れを見ますと、「The ideal of service」（奉仕の理想）という理念が、ロータリーの奉仕理念の中核概念として提唱されてきたということがわかります。

ここまで、「The ideal of service」という理念が提唱されてきた流れを追っかけて参りましたが、それでは、理念としての「The ideal of service」（奉仕の理想）というのはいったい何かというこ

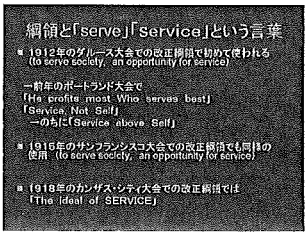
とであります。我々は、「奉仕の理想、奉仕の理想」というふうなことで、さも解ったようにこの言葉を使っておりますけれども、「一体全体、奉仕の理想とは何のことや」ということであります。ここにありますように、ロータリーの現綱領に3ヶ所も出てまいります。前文の中の、「ロータリーの綱領は、有益な事業の基礎として、奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、とくに次の各項を鼓吹し、育成する事にある。To encourage and foster the ideal of service」ですね。第3のところでは、「ロータリアン全てがその個人生活、事業生活、及び社会生活に、常に奉仕の理想を適用すること。The application of the ideal of service」と。第4のところでは、「奉仕の理想に結ばれた事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること United in the ideal of service」とあります。こういうふうに、短い綱領の中に3ヶ所もこの「The ideal of service」というのが出てくるわけであります。それに、「奉仕の理想」というロータリーソングさえあります。けれども、それではその「The ideal of service」というのは、一体何やということについては、手続要覧のどこをひっくり返してもどこにも出てこない。要するに、これはこういう意味だというのは、どこにも解説がないわけでありまして、私は、このロータリーの中核理念としての「The ideal of service」の概念、「奉仕の理想」の概念をよく理解するということが、一番大切なんだろうというふうに思うわけであります。



さっきも言いましたように、我々は、さも解ったように「奉仕の理想」という言葉を使っているわけでありますけれども、実際

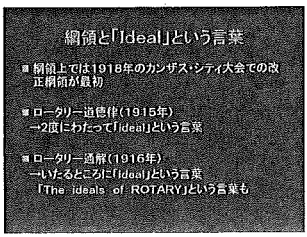
のところはよく解らない。ベテランのロータリーのメンバーに、新入会員が「ロータリーの奉仕の理想って何ですか」というふうに聞いてみても、そのベテランのメンバーは、失礼ではありますけれども、「奉仕の理想は奉仕の理想や。そのうちに解るわ」というふうなことで、適当にごまかしているというふうなこともあります。

むかし、この地区の「ICGF」、とその頃そう言っていましたけれども、「インターシティ・ゼネラル・フォーラム」で、「奉仕」というテーマでパネル・ディスカッションが行われましたところ、ある人が、「奉仕という言葉を広辞苑で引けば」云々、というふうにやられたわけでありますけれども、「奉仕」というのは「service」の日本語訳でありますから、「service」という言葉を英語の辞書で調べるならともかく、「奉仕」という言葉を広辞苑で引いてみても、それはもう全然訳が解らないというふうに思うわけであります。

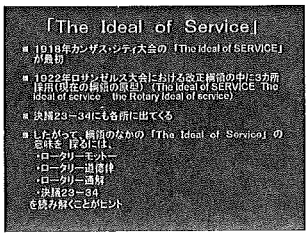


そこで綱領の中で、「service」「serve」という言葉が、何時頃どういう形で使われているのか、というふうなことを、また少し詳しく流れをみていきたいと思います。まず、1912年のダルースの改正綱領で、「to serve society」とか、「an opportunity for service」というふうに、初めて、「serve」とか「service」という言葉が使われております。これは先ほども言いましたように、前年のポートランドの大会で、「He profits most who serves best」とか、「Service, not self」とかいう標語が提唱され、採択されましたので、その流れを受けてのことだろうと思います。その後、1915年

のサンフランシスコの改正綱領でも、同じように「to serve society」とか「an opportunity for service」というふうな言葉が使われておりますし、1918年のカンザス・シティでは、「The ideal of SERVICE」という、「service」が大文字になっておりますけれども、こういう形で「serve」とか「service」という言葉が使われているのです。

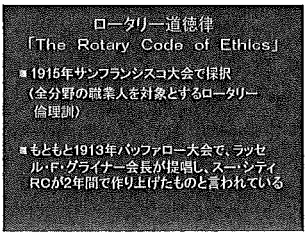


次に、綱領において「ideal」という言葉がどういうふうに使われているか、ということでは、今言いましたカンザス・シティの改正綱領が、初めて「ideal」という言葉を使っていますし、1915年のロータリーの道徳律の中では、2度にわたって「ideal」という言葉を、そしてロータリー通解では、いたるところに「ideal」の言葉、そして「The ideals of Rotary」という言葉もあります。



それでは、この熟語になった「The ideal of service」という言葉がどのような形で使われているかということを見ますと、カンザス・シティの先ほどの「The ideal of SERVICE」、それから22年のロサンゼルスでは、「The ideal of SERVICE」「The ideal of service」とか「the Rotary ideal of service」というふうに使われておりますし、決議23-34にも、各所に出てくるわけでありまして、結局この「The ideal of service」というのは何だということを探るためには、こういう道徳律とか、ロータリー通解とか、23-34を紐解くことがヒントだろうというふうに思っております。

このあたりのところは、実は「ロータリー道徳律」とか「ロータリー通解」とか、そういうものを解説したいがために、無理矢理に流れを持って来たというきらいもあるのですが、やはり我々が、「ロータリーの職業奉仕」を考えるについて、この「ロータリー道徳律」とか、「ロータリー通解」とか、このあたりのところは大変重要でありますので、さしあたりこの辺のところを見ていきたいと思います。



まず、「ロータリー道徳律」でありますけれども、「The Rotary Code of Ethics」、これがご承知のように、1915年のサンフランシスコ大会で採択をされました。すなわち、「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」ということでありますが、もともと、1913年のバッファロー大会で、ラッセル・グライナー会長が提唱し、スーシティ・ロータリークラブが2年間で作り上げた労作というふうに言われております。少し長いのでありますが、こういうロータリー道徳律を、実際にご自分で読むことも少ないと思いますので、大変煩瑣でありますけれども、全文を見ていきたいと思います。これも色々訳がありますけれども、一応小堀憲助先生の訳で行きたいと思います。まず、このロータリー道徳律の前文というのがあります。

全分野の職業人を対象とするロータリーの倫理訓
（ロータリーの道徳律）
（1915年サンフランシスコ大会採択）

前　文

この職業倫理基準は、我々に共通な人間性を求める心をその骨子とするものである。自分の取引、自分の野心、及び自分をめぐる諸関係は、常に、社会の一員としての自分の最高の義務を考慮に入れてのことでなければならない。職業生活の全ての地位において、自分の当面する全ての責任において、自分の主たる思考は、かかる責任を果たし、且つかかる義務を履行し、かくして、その各々の任務を完了したとき、自分は、人間の理想と業績とを、当初よりも幾分向上させなければならない。この見地から、本委員会の議決によれば、国際ロータリーの商業倫理訓の基本は、次の掲げる原則となるものである。

という「前文」がまずありまして、次に、「本文」は、１条から11条まであり、最後に「要旨」というのが付せられております。すなわち、

1．自分の職業に価値を認め、これにより、自分は社会に奉仕する好個の機会を与えられたものと考えるべきこと。
　自分の職業を天職であると考えて、社会に奉仕する良い機会を与えられたのだというふうに考えるべきであるということだろうと思います。

2．自分の身を修め、自分の実力を涵養し、自分の奉仕を広めるべきこと、ならびに、それを通じて、「奉仕に徹する者に最大の利益あり」とするロータリーの基本原則を実践すべきこと。

3．自分は企業経営者であり、したがって成功の野心を抱いていることを自覚すべきこと。だが、自分は道徳を重んずる人間であり、最高の正義と道徳に基づかざる成功は、これを欲するものでないことを自覚すべきこと。

4．自分の商品、自分の労働、自分のアイデアを金銭と交換する

ことは、全当事者がこれによって利益を受ける限りにおいてのみ、適法にして道徳にかなうものであるとの信念を持つべきこと。

5．自分の従事する職業の水準を向上させるため最大の努力をはらい、かくして、自分の業務の処理の仕方は賢明であって、利益を産み、この実例にならえば幸福の道が開けることを、同業の者に知らしむべきこと。

6．同業者と同等ないしそれに優る完全なサービスを尽くすような方法をもって、企業経営を行うべきこと。また、もし完全なサービスか否かに疑念を生ずる場合には、当該債務上妥当な範囲を超えてまでもサービスを行うべきこと。

7．専門職業にたずさわる者又は企業経営者の最大の資産の一つは、その友人であることを理解すべきこと。また友情に基づいて手に入れたものこそ、まさに倫理的かつ正当なものであることを理解すべきこと。

8．真の友人は、互いに何も要求するものではなく、利益のためにみだりに友人の信頼を利用することは、ロータリーの精神と相容れないばかりか、その倫理訓にもとるものと考えるべきこと。

9．社会秩序の立場から他人が絶対に認めないような不正な方法によって機会を利用し、これによって得た人の成功を、正当または倫理的なものと考えてはならないこと。また、物質的成功を得るがため、人が倫理的に問題ありとしてしりぞけるような機会に乗ずるがごときことをしてはならないこと。

10．自分は、一般人に対して義務を負う以上に、同僚たるロータリアンに対して義務を負うものではない。けだし、ロータリーの真髄は、競争ではなくして協力であるからであり、また党

派心は、ロータリーのごとき制度においてはあってはならず、かつ人権は、ロータリーの内部に限られるものではなく、その範囲とその重要性とにおいて、人類そのものの存在と同程度のものであることを、ロータリアンは主張するものだからであり、かつまた、ロータリーは、この高邁な理想に向って、すべての制度に属するすべての者を教化するために存在するものである。

11. 最後に、「すべて人にしてもらいたいと欲することを人に対して行うべし」という黄金律の普遍性を信じ、われわれは、地上の天然資源がすべての者に均等な機会として与えられてこそ、人類社会は最良の状態となるべきことを、主張してやまないものである。

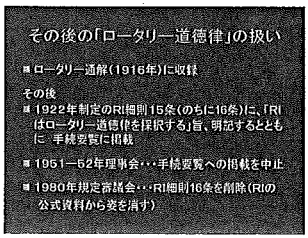
要　旨

この倫理訓の目的

この倫理訓の目的は、個人の完成をその基礎とし、国家の永続はただ自我を温存するためなりとの立場をとるギリシャ的倫理観ではなくして、この倫理訓の根本前提は、愛なのである。すなわち、ロータリアンが正しいことをなすのは、単に自我を温存させるためだけではないのであって、他人を滅すよりはむしろ他人に滅されんことを選ぶ、という立場をとるからである。

このように、この道徳律は、大変高い道徳性というか、倫理性を提唱しております。これが1915年のサンフランシスコの大会の決議でありますので、ロータリー創立後10年でありまして、ロータリー創立10年にしてこのように大変高い倫理基準を提唱していたことは、今から思えば驚くべきことだというふうに私は思っております。

ところで、その後のロータリー道徳律の扱いですが、まず、後で出てまいります翌1916年の「ロータリー通解」に収録されます。それから1922年のロサンゼルスの国際大会で、ＲＩ細則が制定されましたけれども、その15条（後の16条）に「ＲＩはロータリーの道徳律を採択する」旨、明記されるとともに、手続要覧に掲載されました。ところが1951年の理事会では、手続要覧への掲載を中止し、80年の規定審議会は、ＲＩ細則16条の削除をいたしましたので、ＲＩの公式資料から姿を消すことになりました。これにつきましては、ロータリー道徳律は、あまりにも道徳性が高いというか、宗教性が高いというふうなことで、批判が出たりしましたし、それから当時、「四つのテスト」という、もっと簡単明瞭な奴が出てまいりましたので、「四つのテスト」でいいではないか、ロータリー道徳律は、あまりにも宗教性が高過ぎるし、あまりにも長ったらしい、というふうなことで、どうも公式資料からは姿を消したようであります。ただ、この地区内のクラブでも、ロータリーの道徳律をクラブの報告書に載せておられるところもありますし、個人として提唱している方も沢山いらっしゃいます。



それから参考ですけれども、この地区では、1987年と2001年に、地区大会決議で、当地区の独自の「ロータリー職業訓」を制定しております。たしか87年は深川先生が職業奉仕委員長だったと思いますが、その時にまとめられたものでありまして、折角ですから、これも読んでみたいと思います。

国際ロータリー第2680地区「ロータリー職業訓」
(1987年及び2001年地区大会決議)

前　文

1915年のサンフランシスコにおける国際大会の決議によって採択された「ロータリー道徳律」は、その後1922年にいたり、国際ロータリー細則第16条の規定によって規範的効力を付与されたにも拘わらず、1981年1月1日以降、国際ロータリーとしてはその効力を失うにいたった。われわれは、この道徳律の崇高な理念に深く共鳴するが故に、このことを甚だ遺憾に思うものである。

そもそもロータリーは、全世界の全てのロータリアンの共有するところであって、その思想の実体は、利己と利他とを調和せしめることを目的とする一つの人生哲学ともいうべく、ロータリアン個人のあらゆる社会関係において常に適用されるべき行動哲学である。それは、生きとし生けるものに対する限りなき愛の心に基づくものであり、この心は、ロータリアン相互の切磋琢磨によって培われ、自己研鑽に励むロータリアンの社会的実践によって具体化される。これは、時の古今、洋の東西を問わず、ロータリーの世界において適用されるべき根本原理である。

われわれは、この原理を再確認すると共に、自己の職業の社会的責任を深く自覚し、愛の心をもって職業を営むことを誓うものである。

1．すべて職業は、これを天職と心得、自己の職業に誇りを持つとともに、人の職業に対して心からなる敬意を払うべきこと。
2．およそ職業は、自然の摂理に従って営まれなければならず、徒に効率のみを重んずるのあまり、それが自然の摂理に反することにならないよう常に謙虚なる心を持つべきこと。
3．自己の職業に関わる全ての人々と、互いに人間関係を尊重す

ることが職業の繁栄につながることを自覚し、相互に満足と感謝と信頼の心が通い合うよう心がけるべきこと。

4．職業によってもたらされる所得は、適正な対価または正当な報酬に基づくべきものであり、もし、これに反する不正または不当な慣行のあるときは、それを排除するために、たゆまざる努力をなすべきこと。

5．自己の製造もしくは配布する物品または自己の提供する労務もしくは知識については、それを受領する人のために、打算を超えた責任を自覚すべきこと。

6．自己の職業の繁栄は、同業者の繁栄と共にあることを自覚し、常に業界の倫理基準を高めることに務め、もって共存共栄の道を模索すべきこと。

7．職業を営むに際しては、常に、人のためにも涙を流す心を失うことなく、かりそめにも、人の涙の上に自らの幸福を求めることのないよう心を配るべきこと。

こういうふうなことでございまして、これが1987年の当地区の地区大会において決議されまして、更に、2001年、これは中嶋年度でありますけれども、同じものを再度地区大会で決議いたしました。日本のいろんな地区のなかで、大変先進的な決議がこの地区でなされているのだということを、皆さんにお知りいただきたいと思います。

次にガイ・ガンディカーの「ロータリー通解」の話をしたいと思います。これはロータリー道徳律の翌年1916年にまとめられたものでありまして、フィラデルフィ

ガイガンディカー「ロータリー通解」
「A talking knowledge of Rotary」（1916年）

■ガイガンディカー（フィラデルフィアRC）
（1923−24年度RI会長）
関東大震災とガイガンディカー

■1915年「ロータリー道徳律」職業奉仕理念の高ぶり

■「理論及び教育担当委員会」委員長としてまとめる
■高度な職業倫理と奉仕理念を提唱
■「ロータリーのバイブル」
■「Service, not Self」

ア・ロータリークラブのガイ・ガンディカーが、当時の理論及び教育担当委員会の委員長としてまとめたものということであります。このガイ・ガンディカーにつきましては、有名な話がございまして、彼は1923-24年度のＲＩ会長でありましたが、折から東京で関東大震災が起こりました。東京は大変な被害を受けたわけでありますけれども、時のＲＩ会長のガイ・ガンディカーが、直ちに25,000ドルの援助金を、大阪クラブを経由して送りました。それが引き金になって、全世界から89,000ドルに及ぶ援助物資、義捐金が寄せられたというふうなことでありまして、当時の東京クラブは、誕生してまもなくの時代でありまして、例会は月１回であり、そして財界の大物ばかりで組織されていましたので、12月は年末で忙しいから例会を休もう。１月は松の内だから休もう。というふうなことで、大変ちんたらちんたらとした例会をやっていたようでありますけれども、この関東大震災における全世界からのものすごく多額の、今で言うと何十億になるか解りませんけれども、そういう援助に対して、米山梅吉を初めとする東京クラブのメンバーはびっくりしまして、「ロータリーとは大変なものだ」というふうなことで、以後、1922年のロサンゼルスの大会で決議された標準ロータリークラブ定款に沿って、真面目に例会をやるようになったという有名な話が残っております。

この「ロータリー通解」は、先ほども言いましたように、ロータリー道徳律が1915年に決議されまして、大変職業倫理についての機運が高まってきたというその高ぶりの中で、ガイ・ガンディカーが、理論及び教育担当委員会委員長としてまとめたものであります。全編高度な職業倫理と奉仕理念を提唱しております。そしてこの「ロータリー通解」が、以後ロータリーのバイブルとい

うふうなことで、全世界のロータリアンに読み継がれていったということでありまして、このことは、当時のロータリアンの大変高度な精神性に、今から思えば感動するわけであります。なお、この「ロータリー通解」の中では、「He profits most who serves best」と「Service, not self」の二つの標語を引用しております。「Service, not self」につきましては、最近色々と言われているところでありますけれども、少なくともロータリー通解の中における「Service, not self」は、自己滅却の奉仕、自己犠牲の奉仕という意味で使われているように思います。フランク・コリンズが、一番最初にどういう意味合いで言ったのかというのは、私は解りませんけれども、このガイ・ガンディカーのロータリー通解の中には、自己犠牲の奉仕、自己滅却の奉仕という意味で使用されているようでありまして、これが当時のロータリアンたちの間でロータリーのバイブルとして読み継がれてきたわけでございますので、当時の全世界のロータリアンは、「Service, not self」というのは、自己滅却の奉仕というような意味合いで理解していたんだろうというふうに想像しております。

ガイ・ガンディカーについては、私がガバナーの時にガバナー月信に取り上げたりして、私は、大変好きでございますので、ちょっとその中のさわりというか、重要なところを申し上げたいと思うのですけれども、彼は、こんなことを言っております。

ガイガンディカー語録

■ロークリアンは、ロータリーから各種の職業分野に派遣された代表なのであり、各種の職業分野からロータリーに派遣された代表ではない。この解釈をとると、各会員はロータリーの代表として、・・・つまりメッセンジャーとして・・・ロータリーの原理と理想を説き、ロータリーの他人に対する思いやりの精神とロータリーの職業倫理基準をその同業者に伝達すべき任務を、ロータリーから課せられることになるのである。同様にして、ロータリアンは、ロータリーの代表として、自己の職業分野における劣悪な理想といかがわしい商法をやめさせるべき責任を感じなければならない。

「ロータリアンは、ロータリーから各種の職業分野に派遣された代表なのであり、各種の職業分野からロータリーに派遣された代表ではない。この解釈をとると、各会員はロータリーの代表とし

て、つまりメッセンジャーとして、ロータリーの原理と理想を説き、ロータリーの他人に対する思いやりの精神とロータリーの職業倫理基準をその同業者に伝達するべき任務を、ロータリーから課せられることになるのである。同様にして、ロータリアンは、ロータリーの代表として、自己の職業分野における劣悪な理想といかがわしい商法をやめさせるべき責任を感じなければならない。」　つまり、われわれは、「ロータリーというのは、あらゆる職業の横断面を捉えて、それぞれの職業から代表的な人間が集まって構成しているのだ」と、よくこういうふうに言うわけですけれども、現象面としては、確かにそうなのだけれども、理念的には、ロータリアンは、ロータリーという精神的な中核の部分から、職業分野に派遣されたメッセンジャー、大使なんだ。従ってロータリアンは、ロータリーで培ったというか、切磋琢磨のなかで向上させたロータリーの奉仕の理念を、ロータリーからそれぞれの職業分野に派遣されて行って、これを広めていかなければならない。こういう理念を言っているわけでありまして、これが「ロータリアン大使論」とか、「メッセンジャー論」というわけでありまして、大変高度な原理を言っているのだろうというふうに思っております。

そのほかガイ・ガンディカーのロータリー通解の中には、「ロータリーには他のクラブにない特徴があり、その特徴は主として教育的性格にあり、各会員に各自の職種に職業倫理向上の念を植えつけるべき義務を課する点にある。」とか、「出席義務を果たすべき確固たる保障のない場合には、その職種の代表とならない方がよいのである。ロータリークラブというものは、いわば電流の通った電

■ロータリーには他のクラブにない特徴があり、その特徴は主として教育的性格にあり、各会員に各自の職種に職業倫理向上の念を植えつけるべき義務を課する点にある。

■出席義務を果たすべき確固たる保障のない場合には、その職種の代表とならない方がよいのである。ロータリークラブというものは、いわば電流の通った電線のようなものであって、電線というものは、電気が通ったり通らなかったりするようではさしたる役には立たないのである。常習欠席者罷免の原則は、企業上の決断のごとく断固として行われなければならない。出席率の高い会員こそロータリークラブの大きな財産である。

線のようなものであって、電線というものは、電気が通ったり通らなかったりするようでは、さしたる役には立たないのである。常習欠席者罷免の原則は、企業上の決断のごとく断固として行われなければならない。出席率の高い会員こそ、ロータリークラブの大きな財産である。」とか言っております。先ほども申しましたように、ロータリアンは、ロータリーから派遣された大使、メッセンジャーでありますから、そしてロータリーの例会での切磋琢磨の中で自己を高めていくべきものとされていますから、それが例会に出席したり、欠席したりするようでは、ロータリークラブとそれぞれの職業分野が繋がったり切れたりしてしまうではないか。常にクラブの例会に出席して、自己を高めて、そしてそこからの大使として、自らの職業分野に戻ってロータリーの理念を広めなければ駄目だよと、こういう話でありまして、従ってきちんと例会に出席する奴が良い会員なのだと、こういう話であります。

それから親睦でありますけれども、「しばしばロータリーの良き親睦が、ロータリーのすべてであると誤解されている。ロータリークラブの中にも、また揺らぐことのない親睦の確立こそロータリー存在の根拠であると考えている者もある。しかしながら、良き親睦は、決してロータリーの全てではないのであって、良き親睦は、ロータリーという苗木が根を下ろし、そして生長するための土壌をなしているのである。」こういうふうにも言っております。

■しばしば、ロータリーの良き親睦がロータリーの全てであると誤解されている。ロータリー・クラブの中にもまた、ゆらぐことのない親睦の確立こそロータリー存在の根拠であると考えている者もある。

良き親睦は、決してロータリーのすべてではないのであって、良き親睦は、ロータリーという苗木が根をおろし、そして成長するための土壌をなしているのである。

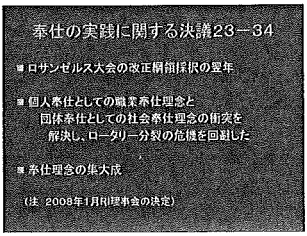
また、「奉仕とは、人の気付かぬうちにそっと物を置いてくるといったような、単に物質的な意味を持つものではない。

■奉仕とは、人の気づかぬうちに、そっと物を置いてくるといったような、単に物質的な意味をもつものではない。ロータリアン的意味での奉仕とは、心の過程のことなのである。奉仕とは、奉仕すべき人と物とを行動に結びつける心の状態のことである。

■会員の心の中に最高の職業倫理基準をなお一層しっかりと植え付けること。ロータリアンとは、奉仕能力の涵養に専念する人のことである。

→ロータリー
ロータリアン
ロータリークラブの会員

ロータリアン的意味での奉仕とは、心の過程のことなのである。奉仕とは、奉仕すべき人と物とを行動に結びつける心の状態のことである。」そして、「会員の心の中に最高の職業倫理基準をなお一層しっかりと植えつけること。ロータリアンとは、奉仕能力の涵養に専念する人のことである。」こういうふうにも言っています。そういうなかで、彼は、「ロータリー」と「ロータリアン」と「ロータリークラブの会員」というふうに峻別いたしまして、「ロータリアン」とは、ロータリーの例会で、自らを高め、そして自らの職業分野に戻ってロータリーの理想を広めていく、それが真のロータリアンだと。そういうことをやらずに、単に昼飯会というふうなことで出席している会員は、「ロータリークラブの会員」というふうに呼んで、ゆめゆめ「ロータリアン」と呼んではいけない。こういう厳しいことを言っております。



次に「奉仕の実践に関する決議23-34」でありますが、これは1922年のロサンゼルスの改正綱領の採択の翌年であります。ロサンゼルスの改正綱領には、「The ideal of service」というのが3回使われていると申しましたけれども、その翌年であります。この決議23-34は、主としては個人としての奉仕理念と、団体としての奉仕理念の衝突を解決し、ロータリー分裂の危機を回避したものというふうに言われておりますけれども、それと併せて、私は、「奉仕理念の集大成」であるというふうに思います。すなわち、決議23-34は、ここにありますように、実践活動の大切さを強調いたしまして、奉仕活動は個人のみならず、クラブで行なうことも望ましい、ということで、個人奉仕のみならず、団体的奉仕も容認いたしま

した。ただ最後に、「クラブがひとかたまりとなって行動するだけで足りるような事業よりも、広くすべてのロータリアン個々の力を動員するものの方が、ロータリー精神により適っていると言える。それはロータリークラブでの社会奉仕活動は、ロータリークラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられた、いわば研究室の実験としてのみこれを見るべきであるからである」として、個人奉仕を強調しています。これは、実は大変重要なことを言っておりまして、われわれは、クラブでもいろいろと社会奉仕活動をやるわけであります。河川の清掃とか、植樹とか、いろいろクラブとして団体的奉仕活動をやるわけでありますけれども、だけどよく考えてみたら、ロータリークラブなんて大したことは出来ないのでありまして、単発的に河川を清掃したり、いろんなことをやったって、実際上、社会的に見れば大したことはない。だけどもそれをやるのは何故かというのは、それをやることによって、その個々のクラブの会員に、社会奉仕活動とはこういうことをするのだとか、こういう気持ちを持ってやりなさいとか、そういうふうな一種の実験といいますか、会員に対する研修というのでしょうか、そういうことをやるのがクラブの団体的奉仕活動なんだ。したがって、大したことでなくってよい。そういう奉仕活動をやって、クラブのメンバーを教育しなさいというわけであります。

決議23－34
実践活動の大切さを強調
奉仕活動は個人のみならずクラブで行うことも望ましい
(団体的奉仕の容認)
→対立する立場を双方とも取り入れ

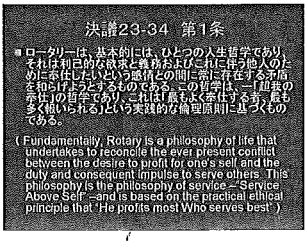
最後に、
「クラブがひと固まりとなって行動するだけで足りるような事業よりも、広くすべてのロータリアン個々の力を動員するものの方がロータリー精神により適っているといえる。それは、ロータリークラブでの社会奉仕活動は、ロータリークラブの会員に奉仕の訓練を施すために考えられた、いわば研究室の実験としてのみこれを見るべきであるからである」(個人奉仕を強調)

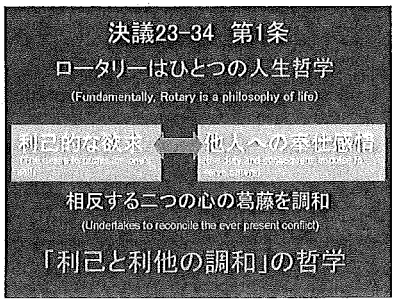
そういうことで、決議23-34は、個人奉仕と団体的奉仕の衝突を、うまく両方の立場を取り入れて解決し、ロータリーの分裂を回避したドキュメントであるということでありますが、奉仕理念の集大成という面としては、決議23-34の第１条が一番のポイン

トだと思うのですけれども、ここで素晴らしい理念・哲学を謳っております。

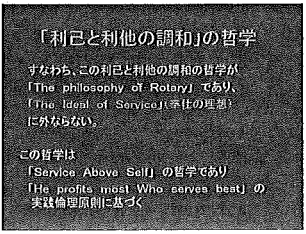
決議23-34　第１条

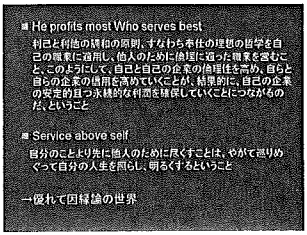
「ロータリーは、基本的には一つの人生哲学であり、それは利己的な欲求と義務、及びこれに伴う他人のために奉仕したいという感情との間に常に存在する矛盾を和らげようとするものである。この哲学は、一『超我の奉仕』の哲学であり、これは『最もよく奉仕する者、最も多く報いられる』という実践的な倫理原則に基づくものである。」というふうに言っております。





ロータリーは一つの人生哲学である。それは何かといえば、利己的な欲求、もっと簡単にいうと、自分だけが儲けたいという気持ちと、他方、他人への奉仕感情、すなわち他人のためにも奉仕しなければいけないではないかという義務感情というのですか、そういう自分の中で葛藤する二つの心を調和するのがロータリーの哲学なんだ、というわけでありまして、これがいわゆる「利己と利他の調和の哲学」であります。実は、この「利己と利他の調和の哲学」が、さっきありました「The philosophy of Rotary」であり、「The ideal of service 奉仕の理想」に他ならないのであります。そして、第１条では、この哲学は、「service above self」の哲学であり、「He profits most who serves best」の実践倫理原則に基づく、

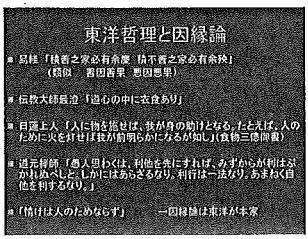




というふうに言っているわけでありまして、これをもう少し解説いたしますと、「He profits most who serves best」というのは、利己と利他の調和の原則、即ち奉仕の理想の哲学を自分の職業に適用し、他人のために倫理に適った職業を営むこと、このようにして、自己と自己の企業の倫理性を高め、自らと自らの企業の信用を高めていくことが、結果的に、自己の企業の安定的且つ永続的な利潤を確保していくことに繋がるのだ、ということであり、利己と利他の調和の原則を適用していけば、企業の永続的な存続も得られるのだというわけであります。「Service above self」というのも、自分のことより先に他人のために尽くすことは、やがて巡りめぐって自分の人生を照らし明るくするのだ、という意味だと思っております。

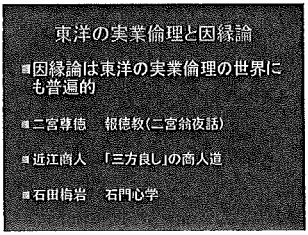
この二つのモットーでありますけれども、これまでは「service above self」は社会奉仕の理念であり、「He profits most who serves best」は職業奉仕の実践理念だというふうに言われておりますけれども、確かにそれはそうなんですけれども、決してそれは区分けする必要はない。要するに両方とも、自分のことよりも先に人のために尽くすこと、ないしは、利己と利他の調和の原則を自分の職業の場で適用すれば、いずれは巡りめぐって、自分の企業が隆々と栄えるのだ、自分の人生を明るくするのだ、という意味では、職業奉仕、社会奉仕関係なくというか、どっちでも適用されるようなことだろうと私は思っております。

こういうふうに見ますと、お解かりのように、優れて因縁論の世界を言っているわけであります。この因縁論でありますけれど



も、因縁論は東洋が本家でございまして、東洋哲学と因縁論というふうにスライドに書いておりますけれども、ご承知のように、易経は、「積善之家必有余慶、積不善之家必有余殃」、善いことをやっているところには必ず良い事がでてくるよと、あまり善くないことをやっていると、必ず悪い事が出てくるよ、という因縁論であります。もっと簡単な言い方では、「善因善果、悪因悪果」。いいことがいい結果を生み出し、悪いことが悪い結果を生み出すよということであります。それから伝教大師最澄でありますけれども、この方は「道心の中に衣食（えじき）あり」、一生懸命仏の道を求めていけば、自分の着るもの、食い扶持、そんなものは後からついてくるのだ、という話でございます。1940年に、この神戸ですけれども、神戸ロータリークラブから岡崎忠雄ガバナーという方が出ておられました。元の岡崎銀行の頭取で神戸商工会議所の会頭だったと思うのですけれども、この方が、この「道心の中に衣食あり」という言葉は、「He profits most who serves best」ということと精神的に同じ境地を言っているのだ、というふうに言っておられます。倫理の高いことをやっていると、何れは物心両面の満足を得られるよ、ということ、一生懸命道（ロータリー道）を求めていると、食い扶持はあとからついてくるよ、という同じ趣旨を言っているのだと、こういうことを言っておられたのだと思います。もっと端的に、日蓮上人は「人に物を施せば、わが身の助けとなる。たとえば、人のために火を灯せば我が前明らかになるが如し」、こういうことを言っておられます。ちょっと即物的とも思えるのですが、暗い夜道で人が暗くて難渋している時に、その人の前に火をさしかけてあげなさい。そうするとその火は、その難渋して

いる人の足元を照らすと同時に、自分の足元も照らすではないですか。人のためにすることは自分のためにもなるのですよ、ということを言っているのですね。また、道元禅師は「愚人思わくは利他を先にすれば、みずからが利はぶかれぬべしと。しかにはあらざるなり。利行は一法なり。あまねく自他を利するなり」、こういうふうに言っておりまして、愚かな人は、「利他を先にしたら、自分の利益がなくなるやないか」というふうに言うが、そうではないよ。他人の利益を図る行為は、自ずから自利となる。そういう意味のようであります。それから昔から「情けは人のためならず」とも言います。人に情けをかけるのは人のためではなくして、それはいずれ回り回って自分のためになるのですよ、ということを言っているのです。仏教は、私は専門ではないですけれども、仏教では「自他不二」と言うようです。不二というのは二面性がないということです。他人のために尽くすのは、自分のためになるのだという、こういう考え方は、仏教の世界では、普遍的な考え方のようであります。



このような因縁論は、東洋の実業倫理の世界にも普遍的であります。二宮尊徳の「報徳教」という教えがあります。ご承知のように、二宮尊徳が箱根湯本の温泉の縁に座って、弟子たちに説いて聞かせたという話でありまして、「二宮翁夜話」に出て参ります。簡単に言うと、温泉に浸かっていて、一方から温かいお湯が流れ込んでくると、誰だってそれを自分の方に掻き寄せようとする。だけどいくら掻き寄せたって、その湯は自分のそばを通り過ぎて、人のところに行ってしまうではないか。そうではなしに。お湯が

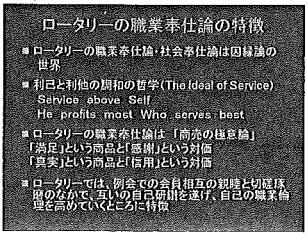
来たら人の方に押してあげなさい。そうするとその湯は人を温めて、いずれは回り回って自分のところに回ってくるでしょう。こういう話であります。少し原文を読みますと、「たとうればこの湯船の湯の如し。これを手にて己が方に掻けば、湯わが方に来るがごとくなれども、みな向こうの方に流れ帰るなり。これを向こうの方へ押す時は、湯向こうの方へ行くがごとくなれどもまたわが方へ流れ帰る。少しく押せば少しく帰り、強く押せば強く帰る。これ天理なり。それ仁と言い、義と言うは、向こうへ押す時の名なり。わが方へ掻く時は、不仁となり不義となる。」「人体の組み立てを見るがよい。人の手は自分の方へ向いて自分に便利に出来ているが、また向こうにも押すことが出来る。これが人道のもとだ。鳥や獣の手は、人と違って、ただ自分の方へ向いて自分に便利に出来ているだけだ。人たるものは、他人のために押す道がある。それなのに自分の方へ手を向けて、他人のために押すことを忘れるのは、人にして人ではない。即ち禽獣である。恥ずかしいことではないか。ただ恥ずかしいばかりでなく、天理に反するから、遂には滅亡する。だから私は、常に奪うことには益はなく、譲ることには益がある。譲ることには益があり、奪うことには益はない。これが天理である。よくよく味わって欲しい。」これは「二宮翁夜話の巻の一の38」にあるところであります。また、「巻の二の42」のところにはこんなことも載っています。尊徳は、天地の道、親子の道、夫婦の道、農業の道を四つの法則と称し、「商法は売って喜び、買って喜ぶようにするべきである。売り手が喜び、買い手が喜ばないようでは道ではない。買い手が喜び、売り手が喜ばないのも道ではない。貸借の道も一緒だ。借り手も喜び、貸し手も喜ぶようにするべきである。借り手が喜ぶが貸し手が喜ばないようでは道ではない。貸し手は喜んでいるが、借り手が喜

ばないのも道ではない。あらゆることはみなこのようである。私の教えはこれを法則にする。」というふうに言っております。この二宮尊徳の教えは、ロータリーの因縁論と大変似ておりまして、後に、大阪クラブの土屋元作という方が、土屋大夢と号しておりましたけれども、この方が1928年の第2回の太平洋地域大会Pacific regional conferenceですけれども、そこで「ロータリー以前の大ロータリアン」という題で、この二宮尊徳の話をスピーチされたようであります。この二宮尊徳の報徳教の話は、まさにロータリーの職業倫理と似通っているというふうに思うわけであります。

それから、近江商人の「三方良し」の商人道というのがあります。「三方良し」という言葉そのものを当時しゃべっていたのではなくて、当時の教えを後生の人がまとめたら、「ああこれは三方良しということだね」と名づけたという、こういうことのようでありまして、これは江戸中期の近江商人であります中村治兵衛（宗岸）という方が、15歳の孫に残した「書置き」に表れた理念が原典のようです。当時の近江商人は、「売り手よし、買い手よし、世間よし」ということで、商いは、単なる売り手と買い手の満足だけでなく、その取引が世間に認められ、社会全体の幸福につながる倫理に適った取引であることが必要なのだ、というふうに言いました。まるでロータリーの四つのテストと同じではないですか。この近江商人の系統を引く会社は今もありまして、たとえば高島屋、大丸、そして西武グループ、外にも伊藤忠商事とか丸紅とか、東綿とか、ニチメンとか、ヤンマーとか、日清紡とかあるわけですけれども、近江商人の系統を引きながら、あまり良くないことをしたという会社も結構ありましたですね。中村治兵

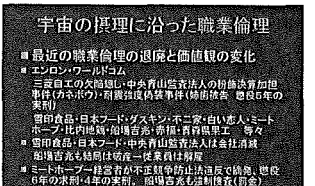
衛さんは、生きておられたら、怒っておられることと思います。

それから石田梅岩の石門心学。「都鄙問答」という本の中に出てくるのでありますけれども、この方は、江戸時代の士農工商の身分社会の中で、士農工商の「商」でありますから、一番下の地位に置かれていた商人に対して、「商人が売買によって獲得する利潤は、武士が主君から受ける俸禄に相当する貴重なものである。」利潤を得るのは当然やないかと。その上で、梅岩は、商人道の本質である勤勉、誠実、正直の精神に立ち返ることが重要である。商人が「仁」・これは相手方を思いやる心、「義」・人としての正しい心、「礼」・相手を敬う心、「智」・智恵を商品に生かす心、というこの４つの心を備えれば、お客の「信」、信用、信頼ですね、ということになって、ますます商売が繁盛するのだ、というふうに言っておるようでありまして、それが「都鄙問答」という本の中に出てまいります。そんなことで石田梅岩の教えは石門心学と言われております。



私は、このような東洋の職業倫理等と同様に、ロータリーの職業奉仕論・社会奉仕論は因縁論の世界であろうというふうに思っております。ロータリーのそれは、「利己と利他の調和の哲学」でありますし、「service above self」、「He profits most who serves best」という二つの標語で表現されておりました。こういうふうに見ますと、ロータリーの職業奉仕論は、「商売の極意論」なのであります。今日一番最初に申しましたけれども、「いかにして」お金儲けをするべきなのかという、金儲けの「仕方」を教え

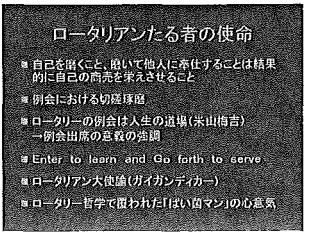
る、それがロータリーの職業奉仕論だと私は思うわけであります。われわれは商品としての物、たとえば時計という商品を売った時に、対価としてのお金を貰う。確かに現象的にはそうでありますけれども、我々の理念は、それだけではなしに、「満足」という商品を売って、有難うという「感謝」という対価を貰う。「真実」という商品を売って、「信用」という対価を貰うのであるというふうに、商売というものを理念することが、自らの商売の信用を高め、やがては隆々と栄えるのだという、こういうふうな考え方が、ロータリーの職業奉仕論ではないかなというふうに思っておるわけであります。それではロータリアンはどこでそういう研鑽を受けるのか。先ほどの二宮尊徳にしろ石田梅岩にしろ、結局ああいう方は、一生懸命自分自身で勉強して、それを弟子たちに教えていたわけですけれども、ロータリーというのは「例会」というのがあります。ロータリーでは、例会でお互いに会員相互の親睦と切磋琢磨の中で、お互いの自己研鑽を遂げ自己の職業倫理を高めていく、というところに特徴があるのだろうというふうに思っております。今日も委員長の話がありましたけれども、最近の職業倫理の退廃とか、価値観の変化というのはひどいものがあります。スライドにずっとあげましたが、エンロン、ワールドコム、三菱自工の欠陥隠しとか、耐震強度の偽装事件とか、最近の食品偽装、



雪印、日本フード、ずーっとありまして、船場吉兆、それから今日は三笠フーズ、こういうのが次から次へと出てくるわけであります。雪印食品、日本フード、中央青山監査法人は、会社が消滅いたしました。船場吉兆も結局は破産になりまして、従業員は解雇になりました。それからミートホープでは経営者が逮捕されまし

て、4年の実刑になりました。船場吉兆も強制捜査を受けました。民事で言えば、ダスキンは取締役に対して株主代表訴訟で52億円の損害賠償命令、蛇の目ミシンは538億円の損害賠償命令。会社が破産しても、代表者、責任者達は自業自得ですけれども、従業員はいったいどうなるのか、というふうに思うわけであります。

ロータリアンたる者の使命。ちょっと格好いいのですけれども、我々ロータリアンの使命は何か。自己を磨くこと、磨いて他人に奉仕することは、結果的に自己の商売を栄えさせること。そして例会における切磋琢磨が必要ですよと。ロータリーの例会は人生の道場であるという米山梅吉さんの言葉がありますように、例会の出席、ガイ・ガンディカーも言っておりましたが、例会の出席が大切なんだ。そこでお互いに切磋琢磨で自己を磨きなさい。そして「Enter to learn and Go forth to serve」、これは「入りて学び、出でて奉仕せよ」ということでありまして、ロータリーの例会で学んで、そして自分の職業分野に戻って、奉仕をしなさいと、こういう趣旨であります。また、ガイ・ガンディカーの先ほど言いました「ロータリアン大使論」では、ロータリーの世界から職業分野に派遣した大使として、ロータリーの哲学、理想を広めていきなさい、というわけでありますし、一寸格好良すぎますけれども、我々は「ロータリー哲学というばい菌」で覆われて、「触ったらロータリー哲学がうつるよ」というくらいの心意気を持って、ロータリー哲学を身につけてやっていくことが、ロータリアンの使命ではないかと思うわけであります。



後半の職業奉仕論の各論は、申し上げる時間が７分しかなくなってしまいました。ここで総論の復習をちょっとしてみます。よく「ロータリーのロータリーたる所以は、職業奉仕の実践にあり」というふうに言われます。深川先生の表現ですけれども、「ロータリーは、職業を営む心・金を儲ける心も、奉仕の心・世のため人のために尽くす心も、同じ一つの心だと考えるのだ、別々に考えるのではない。即ち世のため人のために奉仕する心（愛情の世界に生きる心）をもって職業を営むべし。職業奉仕とは、愛情の世界の考え方をもって打算の世界をコントロールしていこうという考え方である。これが職業奉仕の根本原理である。ロータリーは倫理運動の立場から、愛情の世界に生きる心、即ち世のため人のための心を持って、職業を営んでいると、その結果として、信用という保護膜に包まれて、長期的に安定した利潤を着々と獲得することが出来る強靭な体質の企業を作り上げることになる。この原理の総体を職業奉仕と呼ぶ」というのが深川先生の表現でございますが、まさに我々は、因縁論の立場に立って、「He profits most who serves best」の気持ち、「service above self」という、利己と利他の調和の原則をもってやっていけば、結果的に、信用という保護膜に包まれた、長期的に安定した企業を作りあげることが出来るのだというふうなことだろうと思います。

職業奉仕論（各論）

- ロータリーのロータリーたる所以は、職業奉仕の実践にあり。

深川パストガバナー

- ロータリーは、職業を営む心（金を儲ける心）も奉仕の心（世のため人のために尽くす心）も、同じ一つの心だと考える。
- すなわち、世のため人のために奉仕する心（愛情の世界に生きる心）をもって職業を営むべし。（倫理性の要求）
- 職業奉仕とは、愛情の世界の考え方をもって、打算の世界をコントロールしていこうという考え方である。これが職業奉仕の根本原理である。
- ロータリーは、倫理運動の立場から、愛情の世界に生きる心、すなわち世のため人のための心をもって職業を営んでいると、その結果として信用という保護膜に包まれて、長期的に安定した利潤を着々と獲得することができる強靭な体質の企業を作り上げることになる。この原理の総体を「職業奉仕」という。

そこで、職業奉仕各論の課題としては、取引関係、同業関係、下請関係、企業内管理関係。これは深川先生の「ロータリー学入門」を引用させていただいておりま

職業奉仕各論の課題

（深川PGの論稿の一部を引用）

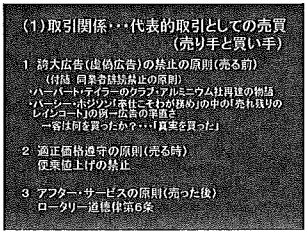
(1)取引関係

(2)同業関係

(3)下請関係

(4)企業内管理関係

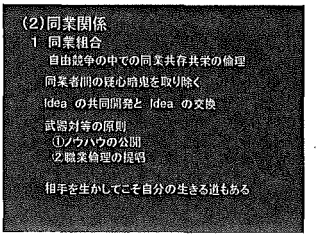
すが、そういう、大きく分けて、こういうものを見ていく必要があります。



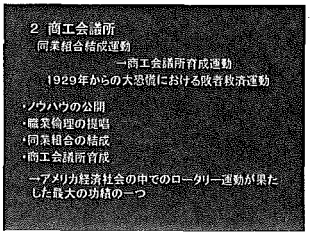
取引関係としては、代表的な取引としては売買ですから、売り手と買い手の問題です。これにつきましては、まず売る前には何が必要か。「誇大広告禁止の原則」である。あわせて「同業者誹謗禁止の原則」、最近は誇大広告というよりも、「虚偽広告」でございまして、けしからんことだと思うのですけれども、そういうことは駄目ですよということであります。ここに二つほど例を示しておりますけれども、「ハーバート・テイラー」のクラブ・アルミニウム社再建の物語がありますね。ハーバート・テイラーが、倒産しかかったクラブ・アルミニウム社の再建を頼まれた時に、どうやってこの会社を建て直していこうかと考えた時に、「四つのテスト」というのを考えまして、この四つのテストをもって、嘘をつかない、誇大広告をしない、というようなことでやって行ったところ、会社が立ち直って、隆々とした会社になったという物語です。その中で、ハーバート・テイラーは、決して誇大広告をしてはいけない。真実だけを述べなさい。広告に関しては、そういうことを言っております。それから例のパーシー・ホジソンの「奉仕こそ我が務め」の中の、売れ残りのレインコートの話。ちょっと時間がありませんので、詳細は深川先生のロータリー学入門とか、パーシー・ホジソンの奉仕こそ我が務めの中に詳しく出ておりますので、それらを読んでいただきたいと思いますけれども、要するに、広告の率直さ、嘘を言わない、誇大広告をしない。それを客がなるほどということで、「客は真実を買った」。こういう事であります。それから、売る時としては「適正価格遵守の原則」、便乗値上げ

をしてはいけませんということ。売った後は「アフターサービスの原則」、これはロータリー道徳律の第6条というものがありますけれども、それに従ってやりなさいというわけであります。

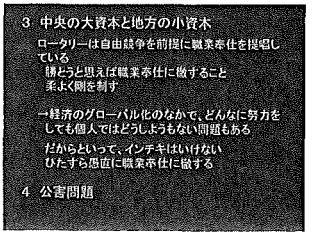
同業組合の関係では、自由競争の中での「同業共存共栄の論理」、そして同業者間の疑心暗鬼を取り除く事が必要だと。そのためには「アイデアの共同開発」と「アイデアの交換」があります。要するに「武器の対等の原則」の中で自由競争をやろうというわけであります。そして「ノウハウの公開」とか、「職業倫理の提唱」。これを敗者のためにもやって、お互い武器対等で自由競争をやりましょう、というわけであります。



それから商工会議所運動。1929年の大恐慌後に、ロータリアンは恐慌にも負けずに残り、隆々と栄えたわけでありますけれども、この恐慌の中で、負けた敗者に対してノウハウを公開し、そして職業倫理を提唱して、同業組合を作ってやっていこうよと、そして商工会議所を育成したということで、アメリカの経済社会の中でロータリー運動が果たした最大の功績の一つだというふうに言われております。

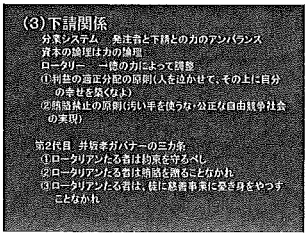


それから大資本、小資本の問題、色々あります。ロータリーはあくまで自由競争を前提に職業奉仕を提唱しているわけ

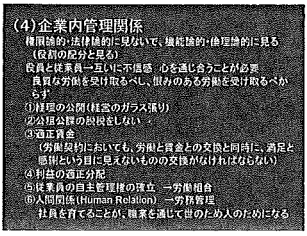


でありますけれども、経済のグローバル化の中で、どんなに努力をしても、個人ではどうしようもないものでもあろうかと思いますけれども、だからと言って、インチキはいけない。ひたすら愚直に職業奉仕に徹することが大切だろうというふうに思います。

下請関係は、えてして力関係、すなわち、発注者との力のアンバランスで、下請が泣くことが多いのですけれども、ロータリーはそういうことではなしに、徳の力によって、利益の適正分配、汚い手を使わずに、公正な自由競争社会を実現しましょうということであります。日本ロータリーの第2代目ガバナーの井坂孝さんが、「ロータリアンたる者、賄賂を贈ることなかれ。」、こういうふうに言っておられます。

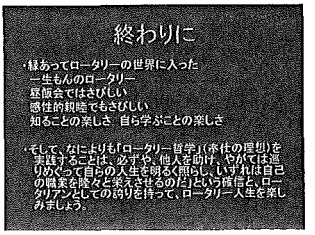


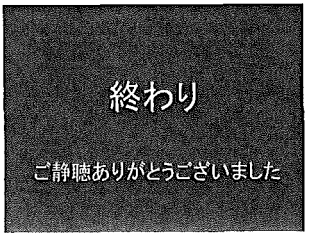
企業内管理関係も、社長と従業員というのは、えてして上下の関係で理解されることが多いのでありますけれども、そうではなしに、社長も従業員も、お互いに役割の配分だ、というふうに、横の関係で見よう。それが大切ですよと。その中で「経理の公開」とか、「適正賃金」とか、「利益の適正分配」とか、そういうふうなことも考えていくことが必要だろうと思います。



最後に、我々は縁あってロータリーの世界に入ったわけでありまして、ロータリーの世界というのは、一生もんでありまして、そう簡単には足抜けができない、ちょっとやくざみたいな世界であ

りますから、単なる昼飯会では淋しいではないか。それからゴルフや一杯飲み会の感性的親睦だけでも淋しい。知ることの楽しさ、自ら学ぶことの楽しさを知っていただきたい。いろいろとロータリーの歴史を辿ったり、理念を辿ると面白いことがあります。そして何よりも、ロータリー哲学、奉仕の理想を実践することは、必ずや人を助け、やがては巡り巡って、自分の人生を明るく照らし、いずれは自己の職業を隆々と栄えさせるのだというふうな確信と、ロータリアンとしての誇りを持って、ロータリー人生を楽しんでいきたいというふうに思うわけであります。





ご静聴、有難うございました。